

史跡
蜷塚遺跡
Shijimizuka Site

浜松市文化財課
Hamamatsu City, Cultural Properties Division



■蜆塚遺跡とは

昭和34年5月13日 国史跡指定
(昭和59年7月25日 追加指定)

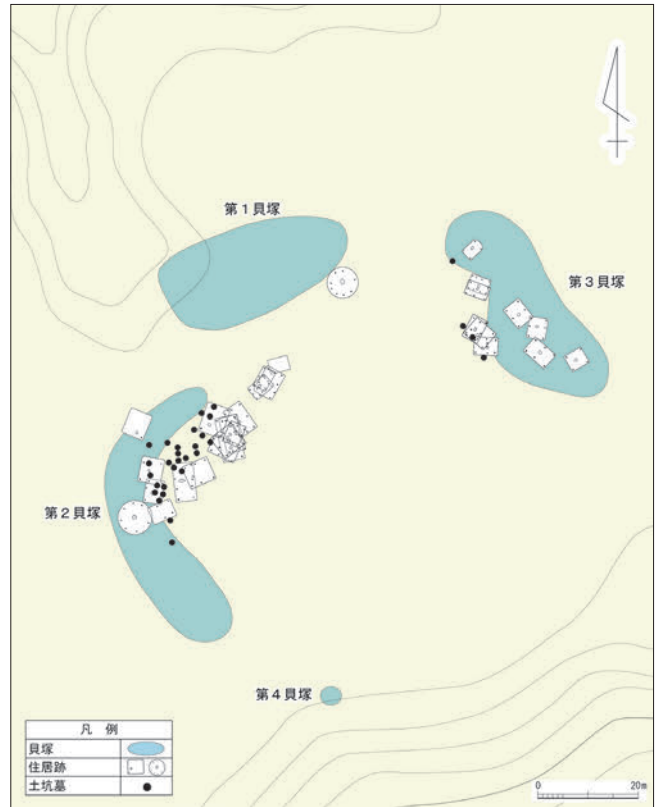
蜆塚遺跡は、縄文時代後期から晩期（約4,000年前から3,000年前）の貝塚を伴う集落跡です。貝塚、建物、墓等の遺構や、土器、石器、人や動物の骨等の出土品から、当時の生活の様子をうかがうことができます。

蜆塚遺跡の貝塚の存在は、近世の書物に確認することができ、明治期以降には踏査や小規模発掘調査が行われました。昭和30～33（1955～1958）年には、4次にわたる学術的な発掘調査が実施されています。

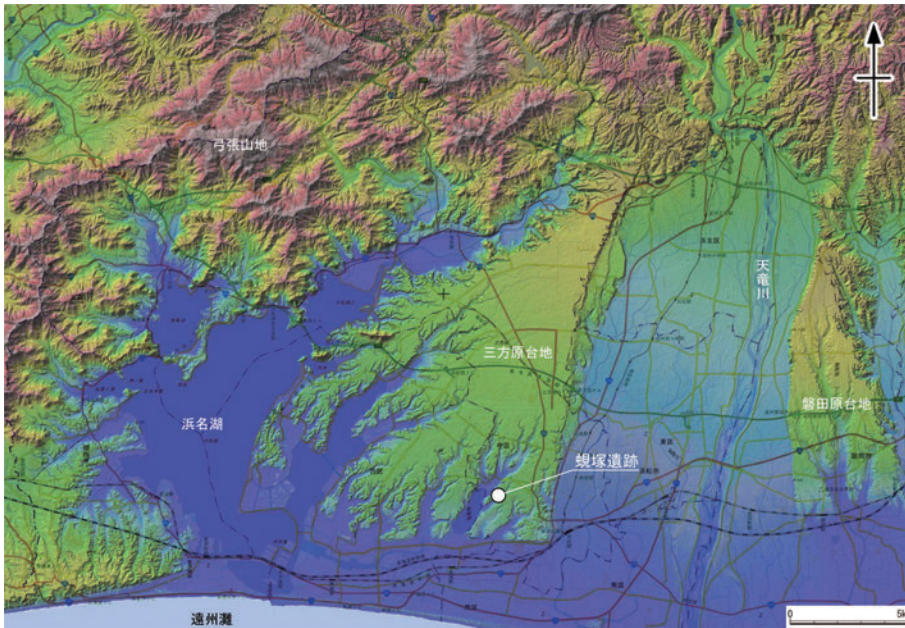
また、発掘調査と併行して遺構の保存処理や建物の復元などの史跡整備が進められました。その後、昭和54（1979）年には隣接地に浜松市博物館が開館し、史跡周辺の公園整備が進められるなどして、現在に至っています。



4次調査の様子



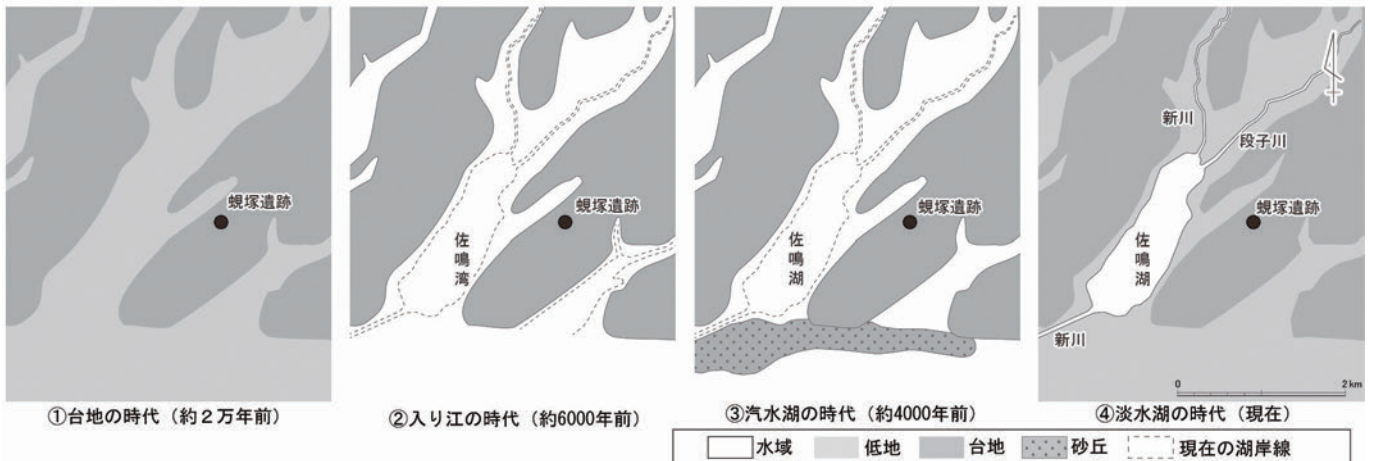
蜆塚遺跡主要遺構全体図



蜆塚遺跡位置図 地理院地図の「自分で作る色別標高図」を使用（作図：小山真人）

■蜆塚遺跡の立地環境

三方原台地の南縁には、小河川による侵食谷が多数発達しており、蜆塚遺跡は、そうした谷に挟まれた台地上に立地しています。蜆塚遺跡の西側にある佐鳴湖は、侵食谷が約6,000年前の縄文海進によって入り江となり、その後の海退期に砂丘によって入り江が閉ざされ、約4,000年前には汽水湖となりました。汽水湖となった佐鳴湖は、シジミをはじめ多様な魚介類が生息し、蜆塚遺跡の集落における重要な食料供給源となりました。



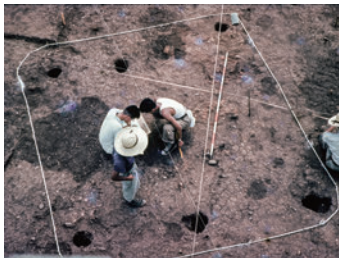
蜆塚遺跡周辺の地形の変遷推定図

■集落と建物

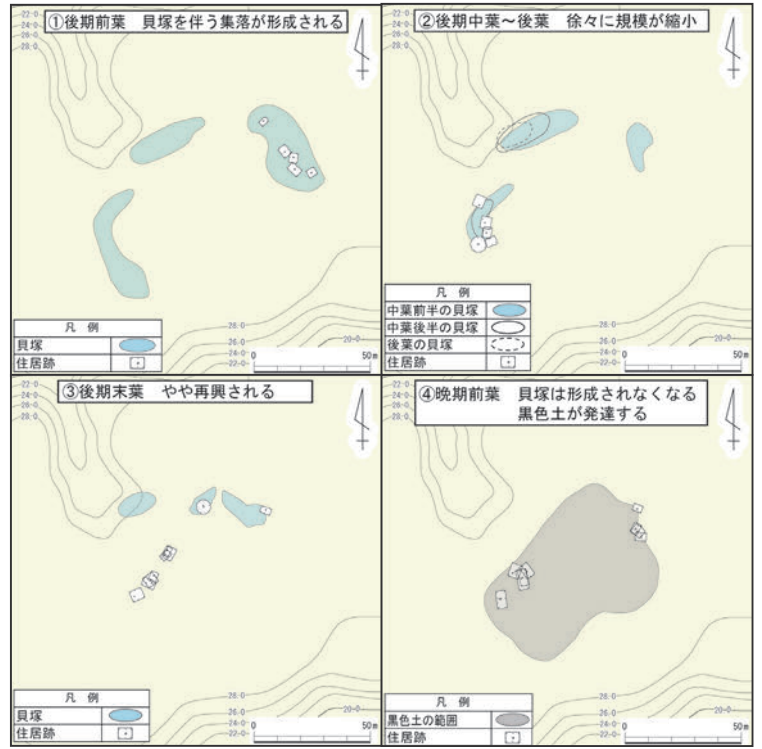
集落 中央の空間を囲むように居住域と墓域がある環状集落です。約1,000年間の長期にわたり営まれてきましたが、同時に存在していた建物は多くて4～5棟程度と推定されており、大きな集落ではなかったようです。集落の推移は右図のような4段階に大きく分けられます。

建物 柱穴や炉が28棟分認識されており、すべて平地建物と捉えられています。近隣の同時期の遺跡でも竪穴建物の検出例は少なく、平地建物は当地域で一般的であったと考えられています。

なお、柱穴の配置から多くの建物の平面形は方形と推定されています。



建物跡発掘調査状況



集落の推移

■食料の獲得

縄文時代には、土器による煮炊きが行われるようになり、食べられる食材の幅が広がりました。貝塚から出土する骨や貝殻、食料の獲得や加工に用いる道具から、当時の食生活がうかがえます。

狩猟具では、鏃が多数出土しており、陸生動物は主に弓矢で捕らえていたようです。出土する陸生動物の骨はシカが多く、イノシシが続き、その他の哺乳類や鳥類も確認されています。

漁労具では、骨製のヤス、石や土器片を加工した網錘が出土しています。出土する水生動物は、貝類はヤマトシジミが9割以上を占め、魚類はクロダイやスズキが多く、汽水域の生物を中心に、外洋性や淡水性の生物も確認されています。

植物遺存体は未確認ですが、石皿や磨石、敲石、凹石が出土していることから、木の実などを採集して加工していたことがうかがえます。

これらのことから、湖や森林に近接し、食料を獲得しやすい環境が整っていたと考えられます。



第1貝塚の断面

4つの貝塚のうち、唯一谷部に形成されており、厚い部分では1 m以上の堆積がみられます。



石皿と磨石



石鏃の刺さったシカの骨
刺さった部分に治癒痕があり、致命傷ではなかったようですが弓矢の威力がうかがえます。



ヤスや鏃などの骨角器
シカやイノシシの骨を利用

陸上哺乳類	鳥類	魚類・水生動物			貝類		
		外洋性	沿岸・内湾性	淡水性	外洋性	沿岸・内湾性	淡水性
ニホンジカ、イノシシ、ノウサギ、タヌキ、アナグマ、ニホンザル、テン、カワウソ、ニホンイヌ、ニホンオオカミ など	キジ、ツル、シギ科、サギ科、ウミウ、コガモ、ヤマドリ、トビ、ハヤブサ など	カツオ、マグロ、ブリ、クジラ、ウミガメなど	クロダイ、スズキ、マダイ、チダイ、マフグ、アカエイ、コチなど	コイ、フナ、ニホンヒキガエル など	ダンベイキサゴ、テングニシ、サルボウなど	ヤマトシジミ、ハマグリ、イソシジミ、シオフキ、マガキ、オキシジミ、アサリ、アカニシ など	カノコガイ、オオタニシ、タケノコカワニナ など

貝塚から出土した主な動物

ゴシック体は、特に出土数が多いもの

■くらしの道具、祈りの道具

くらしの道具 食料の調理や配膳、貯蔵に用いられた土器は、深鉢、鉢、浅鉢、壺、注口土器などが出土しています。貝塚形成の始まった後期前葉頃は、関東の影響を受けた土器が多く、後期中葉以降の土器には次第に西日本の影響が強まります。中には東北地方から搬入された土器もみられます。

地面を掘る道具として打製石斧や鹿角斧が、木を伐採し加工する道具として磨製石斧が用いられました。動物骨を加工して作られたへら状工具は、土器製作などに使用されたとみられます。

なお、編物は出土していませんが、土器の底部には製作時に敷いていた編物の跡が残っていることがあります。



鹿角斧



出土土器



装身具

祈りの道具 装身具として、骨製のかんざし状髪飾り、土製の環状耳飾り、首飾りに用いられた石製の各種玉類、貝製腕輪などが出土しています。人々はそれらで身を飾りながら、さまざまな祈りを込めていたと考えられます。また出土数は少ないですが、石棒や土偶が出土しています。石棒は男性器を模しており、子孫繁栄などを祈る対象と考えられます。土偶は破片のため詳細は不明ですが、女性をかたどり、安産祈願などの対象としていたものと考えられます。



土偶

石材の流通 石器は、在地で入手できる石材のほか、ヒスイ（新潟県産）や黒曜石（長野県産）、サヌカイト（香川県産・大阪府産）など、遠隔地で産出する石材も用いており、当時の交易範囲の広さをうかがうことができます。

■墓と人骨

埋葬方法 人骨が40体近く確認されています。土坑墓出土例には屈葬が多く、わずかに伸展葬もみられます。また、埋葬頭位は男性が北向き、女性が南向きの傾向が認められ、性別による区別が行われています。中には貝製腕輪やヒスイ製大珠を身に付けた状態で埋葬されていた人骨もあり、ムラの中心的人物であった可能性が考えられます。

人骨からわかること 成人の通過儀礼や婚姻を示すとされる抜歯が7体の人骨に認められます。また、頭骨に矢が刺さった可能性がある刺突痕を有する個体があり、争いの存在がうかがえます。

人骨の理化学的分析では、放射性炭素分析による年代測定のほか、安定同位体分析により食性を探る研究において、陸上哺乳類や淡水魚を中心とした食していた可能性が指摘されています。今後こうした分析がさらに進むことで、蜷塚遺跡の縄文人の姿が明らかになっていくことが期待されます。



下顎犬歯を抜歯した人骨



屈葬人骨

蜷塚遺跡に関する問い合わせ先：浜松市博物館 〒432-8018 浜松市中央区蜷塚四丁目22-1 TEL 053-456-2208
蜷塚遺跡に隣接し、出土遺物や貝塚断面、屈葬人骨の出土状況等を展示しています。